



TITLE:

西[遊]夢録(二十二)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(二十二). 地球 1929, 12(1): 67-71

ISSUE DATE:

1929-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183625>

RIGHT:

西遊夢錄

(二十二)

瀧川規一

蘇國の部

「アルツルイの一夜」雜香繁劇の巷に日を送る者にとつては時偶の閑寂な一夜は云ひ知れぬ悦しさを感ずる。今日までの宿と云ふ宿は皆満員若くは満員に近き有様であつたが此處の宿ばかりは一夜の旅客は僅かに二組である。五十歳を幾つか越したかと思はれる年輩の紳士が三人の男兒を連れてゐるのがその一組である。三人の男兒は十六歳、十四歳、十二歳であつて長男のものが自己紹介の時に話した如く等差級数の三人兄弟である。これ等の若紳士は父親からロツホ、ロモンドの話を畏つて聞いてゐる。他の一組は自分と旅連れの旅行靴とである。餘り高莊ならず外郭の大きくない旅宿であるが旅客の僅少なことも因をなして話聲一つ聞えぬ静さである玄關前の庭、湖畔に至るまでの森、旅館の左右に聳る山嶽の連り、幾曲りの谿谷を流れ來つて館側を走るフアロツク (Fire Road) の谿流、山峻しと雖も故國の山岳に比すれば猶軟か味豊かな淺緑に若草の蔽へる山腹、森間及び谿間を縫うて走れる山道には人影見ること稀な朝夕等この宿の連想として何一つ閑寂ならぬものはない。名も知らぬ樹の莖を這はして藤棚

の如く作れる棚下に置かれたベンチに憩ひ、夕食のベルを待つ間に吾等五人は閑談をはじめぬ。

極東に就いては父親よりも小供の方が理解に富んでゐるらしい。小供等が通へる學校に日本の軍人の小供があるとの前提をなし一人の小供は「日本人は利口だと思ふがさうか」と聞く。「そんなことを聞く奴があるか」と他の一人は制止するその理由として「お前は賢いかと聞かれて俺は賢いと答へる奴が無い。他國の旅行者に向つて印象を聞くのと同じだ。英國人に向つて英國の惡印象を云ふ人が殆ど無いからね」と云つた。緘黙を守つて居つた父親までが添口をする「近頃學校では極東のことをよく教へる。従つて極東人を見ると小供等は知的好奇心に驅られて種々のことを聞く。出來得る限り満足してやつて呉れ」と父親は云ふ。小供らしい種々の質問が續出する。そのうちに難問が一つある「日本人は小柄な人間を賢いとして何び背高の人間を愚鈍として蔑むと聞いてゐるがそれは何故か」と云ふのである。年下の小供は兄のこの質問を耳にしながら余の頭の上から足の下まで見下ろし見上げて居る。身長を目で計測してゐるらしい。他の二人はその弟

の様子を見て笑ひ出す。「それでは余は背の高い日本人だと思ふか、それとも低い部類に屬すると思ふか」と一寸質問を返へて見る。「僕の知つてゐる日本人は君より背が低い。すると君は僕の知つてゐる日本人よりは賢くない筈だ」と小供の一人は笑ひ乍ら減らす口を叩く。「エスキモーと印度人と何れが賢いか」とこちらも交へ返へす。「有色人種は全く判らないれ」と一人が云ふ。「では白色人種間でどちらが賢いか」と聞き直す。「エスキは有色人種か白色人種か」と一人は質問の矢を投げる。五人共にエスキモーは何れに屬するか判らない。閑談は閑談を生んで盡きる處を知らない。やがて食卓も同一食卓を圍み食後散步を共にする。少年等の談話は語尾明哲で齒切れがよい。この子福者たる父親を羨むこと千萬無量であつた。

【クリアンナリツヒ】(Criananich)。この六つかしい地名はアルツルイの停車場から北に走ること一時間足らずの距離にあり山間の鐵道三線の交差點である。一は蘇國高地の山間を縫うて東海岸に出づるもの、他は北上してインヅアネスに行くもの、第三は西海岸のオーバンに走るものである。どうしても時間の都合でこの僻地の停車場で乗換へなければならぬ然かも余が目指すオーバン行の列車には三時間待たねばならぬ。驛構内を出づると僅に二軒の人家がある。

山腹を走る汽車の窓から見下ろした峽間の景色はえも云はず美しい。四方を廻る山峯の連なりと豁谷の迷走と人道の羊腸とが誘因の最大原因をなしたのみならずゲリーツク語の本場

に入つて豫れてより用意の語學を試めず好機が來たと云ふ勇猛心によつて、生憎磁石をもたぬ爲め方角すらも判らぬながら、奥地へ歩み続ける。一時ばかり歩んで一時間ばかり戻れば汽車には間に合ふ筈だとの胸算用であつた。人家は容易に見えぬ。豁谷と山峽とは旅客を靜に迎へ誰の所屬とも知れぬ山羊や羊の群が此處彼處に散點して若草を喰んで居る。いづよりともなく老婆が一人急ぎ足で山腹を下つて來た。村落の有無を聞かんと欲する間もあらせず老婆は先づ余に口を開いた。「停車場は何哩前方か」ときくらしい。驛名丈けは判つてゐる。豫れて用意の手帳と鉛筆とで驛名を書いて見せる。婆さんは手眞似で「讀めぬ駄目だ」と云ふらしい。「村はあるか」と聞くと「ある」と答へる。「その村までは何時間程かかるか」と尋ねると「眞近かだ」と教へて呉れる。何か知ら判らぬことを嘸きながら婆さんはすた／＼と驛の方に行く。やがて村落なりと教へられた處に行く。何のことはないまでも只二軒の小屋があるばかりである。十六、七歳の山の小娘が怪訝な顔で余を眺めて門口に佇立する。

一人の青年が家から姿を現はし「婆さんに出會つたか」と尋ねる。やがて隣家からも三人ばかりの男女が姿を現し余を取り巻く。銀貨を先づ見せて「ミルクがあるか」と聞く。山羊のミルクをコップに一杯注いで呉れる。六片の銀貨を渡すと、最初一杯が六片位だらうと思つて居たのがもう一杯注いで呉れる。満腹ながら止むを得ず飲む。何となく腹工合がよくない。山羊のミルクの中毒ではないかと氣になる。この間

の對話の用語は英語蘇語ガーリック混用である。ガーリック語に就いては耳の練習不足がある。凡そ語學の練習では如何に口が達者になつても耳の練習が缺けて居ると何の用もなさぬ。ガーリックの單語文は先方に通ずる。然し先方の口早のガーリックが判らない。蘇語では先方の云ふこともこちらの云ふことも可成に判る。然るに青年は語尾明瞭な而かも丁寧な英語で、^{その}敬語を連發しながら頻に話しかける。青年はその英語を話すのが得意であるらしい。やがて娘はガーリックの小唄を口吟みながら用事ありげに裏の山腹を登つて行く。ガーリック語に興を感じ去るを忍びないが時間が許さぬ。急ぎ足で停車場に戻る。どうしたのか先刻の婆が見えない。

車内には小柄な赫顔の紳士が居る。妻君と娘とが側に各小包を携へて余と對坐して居る。隣席にはまたも白哲の青年が居る。暫時互に沈黙を守つて居る。やがて青年を捉へて話の緒をつける。青年はスカイの島(The Isle of Skye)で牧業をハタケ年繼續し初期の目的を達したので今歸國の途中であると云ふ。島では何語を話すかと聞く。ガーリックだと答へる。對坐の紳士は「ほんとうかしと聞くや否やガーリック語で青年と口早に對話を始める。片言ながら察知し得た要點は牧畜の獸の種類と利益の割合を聞いてゐるらしい。彼等兩人共に「日本には羊や山羊の飼養が盛であるか」と聞く。「都會人であるから知らぬ」と答へる。余の洋服を見て、「これは蘇國產の羊毛でなくて濠洲產」などと云ふ。農業の出身でありな

が牧畜に就いては何の質問にも答へられないのを今更ながらに遺憾に思ふ。

山雨忽然と來り車窓から見る山谷は朦朧としてまた風情の變化を増す。山の背を西に超えて山勢が西岸の傾斜となつた頃から空は晴れる。オーバン(Ober)の港が見え始める。列車は一大迂曲をなして停車場に入る。極東から來た貧寒の一書生が大膽にも一大ホテルに宿を求める。宿帳を見て今日の投宿客の名を調べる。何々公爵と云ふのが居る。帳場の前を人拂ひをなすが如く案内をしてゐたのが夫であるらしい。上品な瘠せきすな六十歳に近い老紳士と同年輩の白髮の貴婦人らしいのと四十歳前後の秘書らしいのがその一行であつた。

「オーバン」海港オーバンはローンの入江(The Firth of Lorn)にある。海岸に而して灣曲し背に山を負うて市街は感じのよい町である。新に都會に到着する毎に今更のやうに相談相手の無いのに淋しさを感ずる。斯うした場合常に宿の帳場で相談する。

どうしたことが帳面の男はこちらの尋ねることに満足な返事を與へて呉れない。公爵様の投宿で何となしにそわ／＼して居るやうにも見える。寢室も感じがよい。轉宿の必要もない。一策を案ずる。書齋屋に行つてガーリック語の歌集でも讀ひ、その序に見物す可き場所や事物を尋ねやうと考へる。文房具店に行くと言籍が可成にある。詩集歌集もある。一冊をあがなひ店主を捉へて話を始める。ガーリック語の詩集を

買ふ程の人物ならガーリック語に堪能なりと早合點をし、店主は頻にガーリック語で話す。あまり口早な爲めに何のことが判らない。「ガーリック語を喋り得ずして微妙なガーリック語の韻文など判るか」と店主は單刀直入に痛棒を喰はす。蘇國のガーリックと愛蘭のガーリックとどう云ふ風に異なるかと聞いたが、笑つて答へない。然し見物すべきこと丈けは丁寧に教へて呉れる。

「スタファアの島とアイオナの島」(Staffa and Iona)

スタツファアの洞門に行くには海日和を撰ばねばならぬ。故國にありし昔、鵝外博士の譯になる即興詩人を讀んで記憶に留めて居るのは伊太利のカプリ(Capri)島の琅玕洞(The Blue Grotto)の記事である。鵝外先生の譯筆も名文であるポール・ヘイス(Paul Heyse)のユラヤンタ(Jurabbanta)の記事も名文である。蘇國にある日類似の海上の洞窟を見れば伊國に遊ぶ日の參考にするのも無駄にはならじと考へた。且つは蘇國の文化の發現地とも云ふ可きアイオナ島に上陸し 세인트・ロロンバ(St. Columba)の遺蹟を探ることは蘇國探勝の一誘因であつた。

伊國カプリの島の青洞の入口は岩壁低く垂れて船にて潜り入る際には乗客は皆頭を低く垂れる人頭、岩壁とが堅固さを競争することを恐れるのである。一度入口を潜れば内は高さ四十一呎、長百七十五呎、幅百呎の波の大廣間であつて、入口から射し込む日の光と六十呎の海底からの反射とによつて波の床はうす光する青焰の敷物となる。何れの記者も叙景の

筆を持たぬと叫ぶ。これが琅玕洞の實況であるとすれば、スタファアの洞窟も亦これに類するものでないか。未だ實見せぬ時より空想を逞しくせざるを得ない。御國自慢の英蘇人が未だスタファアの洞窟を讚美したのを聞かない。案内記の説明は簡単に「愛蘭にあるものと等しく玄武岩の洞窟」であると云つて居るに過ぎない。

海日和の目が間もなく來た。船上には遊覽客満員である。沿岸の城壁海岸等を左に眺め蘇國豪族の居城や慘血の闘争の説明を乗客の一人から聞くうちにスタファアの島の附近に停船する。短艇を卸ろして本船から客を運ぶ。乗客は急がしく先を爭ふ。異國人たる吾は最後に乗り移る。六角若くは八角の玄武岩から成る海の孤島に移り石の切面を拾ひ、島の一角に到れば岩壁に傳つて漸く進み得る岩窟がある。脚下には清澄碧水の波が洞窟の岩壁をうつてある。洞窟の奥から外を見れば琅玕洞の説明に似てある。伊國の船は旅客に探勝と賞鑑を恣にせしめる準備が出來てあると云ふ。然るに蘇國の船は徒に客を急がしめて靜かに自然の怪異を味はしめなう。

短艇の船頭までが「婦人は最初に」(Ladies First)と叫んで洞門に近づく男子を徒に待たしめ、洞門に入るや否や歸船を急がしめる。のみならず「異國人は後に」(Strangers Last)と怒鳴る。結局折角の探勝を不快の感にて破壊せしめる。

本船に歸れば何ぞ圖らん他の乗客は岩壁にかけた梯子に登り島上の草原から周圍の絶賞を悠々と眺め暮して容易に歸

らない。余が梯子を登らんとした時船頭の一人が遮断した。その理由を船長になぐすとボケツトの工合だと云ふ。誰もボケツト・モニーが船頭に呉れて居るのを見つげなかつたから自分に出さなかつた。内外人待遇を異にするかと云へば船長はあの島には迷信があるので異國人を嫌つたのであらうと云ふ。開きたゞせば、異國人を島頂に乗せれば下にある洞門が陥落すると船頭等は信じて居るからだと云ふ。女人禁制は極東にはある蕨國には異國人禁制がある。ボケツト・モニーを要求するコーカニーが余をして島上の勝を探らしめなかつた。本船の拔錨を待つ間に短艇から登り来る人には日本人の素早さを感心する「もう行つて来たのかう」と余を取圍んで尋ねるかと思へば、余を呼びかけるに、ミスタ・ブラウン、(Mr. Brown)と云ふ者、ミスタ・ダーク(Mr. Dark)と云ふ奴、オールド・ブラック・フロー(Old Black flow)と云ふ者がある。何と呼ばれやうとも自分は海上の孤客である怒は損と心得て程々に相手になつて居る。スタファアの島は不快の印象を與へたのみで、即興詩人の心地はどこへやら消え去つて居る。やがてアイオナに船は着く六世紀に愛蘭出身の高僧聖コロンバがこの島に僧院を建て基督教の傳播につとめた。今日猶僧院の一部と寺壁と墓所とが朧々として殘存してある。

僧院跡にある墓は蘇國及び愛蘭の多くの豪族王族の墓であるが草生ひ茂り只二つの十字架のみが當時の意匠と傳教の昔を物語つて居る。

一行中に倫敦の大學の教授が居る。名は知らぬが見覚えの顔であり数名の女學生を引き具してある。墓石と十字架とを捉へてありし昔の説明に瀟灑を傾けてゐる。

摘錄

OS-Fujiwara and T. Takeyama:

On the Mechanics of the Great Sagami Bay Earthquake on Sept. 1, 1923. (地震研究所彙報第六號、昭和四年三月)

地殻の渦動を主張する著者が昭和三年に陸地測量部に依つて確かめられた關東地震當時に起つた陸地の水平移動を基礎として關東地震發生の機巧を論じたものである。

陸地測量部發表の結果によれば關東地震當時に起つたと考へられる陸地の水平移動は宛かも伊豆大島北東部の相模灣溝を中心として其の周圍の地域が時計の針と同方向に廻轉せるが如き結果を示して居る。之は下野の晃石山を不動點筑波山と晃石山とを結ぶ方向に變化がなかつたものとしての計算であるが、此く想定して甚しく誤りのなからべきは晃石山附近には何等の著しき地震の變動が起らなかつたことから大體肯定されねばならぬ。然しながら晃石山を不動點として表現された結果は甲府の北方山地等にも著しき水平移動が起つた結果となり、地震によつて他の變動が殆ど起らなかつた事實と